

招待席

中里 介山

なかざと かいざん 小説家 1885年～1944年 東京都（現羽村市）生まれ。1906（明治38）年に都新聞に入社。1909（明治42）年、初めて、新聞小説『氷の花』を都新聞に連載する。1913（大正2）年に都新聞で、連載が始まり、その後、幾つもの新聞に連載が受け継がれ、更に、書き下ろしも含めて、1941（昭和16）年まで、書き継がれた未完の大長編小説『大菩薩峠』。これにより大衆小説の藝術的達成に腐心し成就したとされ、国民文学を意図した雄壮稀有の作家であった。掲載作は、1905（明治38）年9月刊の「火鞭」第一号に初出。二十歳の文章であるが、後の『大菩薩峠』の色合いが、すでに滲み出ている。1965年7月筑摩書房刊「明治文学全集 83 明治社会主義文学集（一）」に所収されており、それに拠った。

笛 吹 川

（上）

過ぐる事三年の昔。峽東の風物を探つて信濃の山に別け入る可く、自分は志保の山。差出の磯を経て笛吹川の沿岸を遡つた。

磊々たる花崗質の巨石に激する水流の響は絶えず鳴響の音を耳に送る其外に、行手の山の奥から、はじめは簌々として松の嵐かとも思つたが、やがては悪魔の唸声か但しは暴風雨の襲来かと疑はれる様な一種の響に襲はれつゝ進んだ。

愈々進むに従つて、その響は愈々高く愈々強く愈々凄く耳を打つ。瀧か？ 瀧の音は人に壮快の念を惹起さしむるものだが、これは寧ろ鬼気と悲気と交々我を圧する様な響。瀧ではあるまいき何だらう。此れが彼の八ヶ嶽の奥に住む山神の鼾声ではあるまいか。仰で白雲かゝる甲信の連山黒魔の如きを見た時、かの山とこの響とは我をして一種森厳なる「怖」を感じしめざるを得なかつた。

山外山あって山尽きず。尾を廻り谷を越えて不図自分は人家二三十を数ふる一の山村に達した。村の名を三富と呼ぶ。例の響は此処に至つて全谷に満ち全村を震はすばかりの烈しさとなつた。

足を早めて其の響の方に村を外れると俄然！ 我脚は股慄して我毛髪は一時に豎つた。自分はまだ此の様な「恐怖」の自然に接した事が無い。

水勢肥え溢れる様な丈余の大瀧。前山の断崖を劈て奔下しそれが斜に流れて、すぐ我脚下なる、

方一町ばかりの大洞穴の中に大巴小巴を捲きつゝ流れ込むのである。あゝ怖るべき此の大洞穴！

鬱然たる深山木はその四辺を蔽ふて洞内夜よりも暗く、蛟龍珠を得て驕ると云つた様な水の流は一種凄烈の気を放ちつゝ悠々として底知れぬ洞穴に捲き込む。捲き込むと共に、はじめ白かつた水は青くなり、青かつた水は黒くなつた。黒くなり遂に白光を帯びて来た。白光を帯ぶるや否や腹の底から人を戦慄せしむる様な凄絶な唸声が耳を貫いて起るのである。

汝我に來れと死の神より招かれた様な言ふべからざる恐怖に打たれて自分は石像の如く深淵を眺めて立^{つく}尽した。

我に返って眼を挙げると、向ふの山径を老少取り交ぜた白衣^{びやくい}の一隊が至って無雑作な御輿を陣頭^{かざ}に翳して肅々として此方^{こなた}を指して乗込んで来る。祭礼か、葬式か、鳥渡^{ちよつと}自分には見当が着かなかつたのである。

気が注かなかつたが自分の居る所から一町許^{ばかりさき}先の方に、竹を以て櫓の様なものが構^{かま}つてあり注帳^{しめ}を張り廻らしてある。彼の一隊は其処に立止まり御輿^かを昇^{おろ}き下して其の上に据えた。自分は好奇^{ものずき}に駆られて進み寄つた。彼等は云ひ合はした様に自分の洋服^{すがた}扮装に眼を注ぐ。

一寸会釈しながら自分は『御祭礼ですか』装束した神主風の男を目がけて問ひかけた。『左様でございす』と恭しく答へた神主の朴樸な面から眼を迂らして御輿を覗いた時、自分が意外に堪えられなかつたのに、中に置れたものは熨斗^{のし}をかけて水引で結んだ一組の重箱であつたからだ。『何様の御祭礼ですか』

『お鮎様でございすよ』

自分の間に答へて呉れた神主は更に自分を怪訝^{くわいが}の渦中に引入れた。

『お鮎様？ 食べる鮎ですか』

『ハア左様でございすよ。』

埃及^{エジプト}開国以来色々の迷信を聞いた。けれども鮎を崇拜すると云ふに至つてば断じて前代未聞の珍事である。自分の好奇心は愈々深く神主を追求せねば已まぬ。幸なるかな。此の神主、甚だ話好きの人であつた。

(中)

『お嬢様、私は「釜の主神^{ぬし}」へ御礼^{かう}の為、斯如して毎晩笛を吹きに来るんです。』

石に腰を下した美少年。弊れた衣服は闇にかくれて見えず、珠を欺く白玉の面に隈無く晴れた十三夜の月を仰で、手に一管の横笛を按じつゝ、相對して立つた一美人^{すらり}。嫂婷として容貌花の如き白地浴衣姿の令嬢の間に答へた。

『釜の主神へお礼？ 何のお礼なの。』

『お嬢様、私はねえ、下釜口の鮎屋の子なんです。私には父親^{きやうだい}は無い、同胞^{おや}も無い、母親一人子一人なんだけど、そのお母^{つかさん}様は久しく病気で寝て居るんです。

と、美少年は声^{うる}を湿^たまして首を俛れた。

1 ここには本来「』」が入るべきだが、直接話法が終わっているのは明白なので、「』」を省略したのだらうと思われる。以下にも同様の省略が見られるが、特に注記しない。(電子文藝館編輯室)

『それでお前が商売をしてお母様を養つて居るの、まあ。

と、美人は同情の籠つた眼で美少年を見下した。

『それでね、毎朝私は此の川下で鮎あしがらを捕つて、それでお鮎あしがらを拵こしらへて河浦かはうらと塩山えんざんの湯治場ひがほりへ日交替ひがほりに売りに行く……有難ありがたいんです……その鮎あしがらが毎朝きつと定きまつた数だけ「ウケ」の中に入つて居るんです。そして毎日拵こしらへただけのお鮎あしがらは売り切れない事はありません……お母様が云ふのに此れは必定きつと「釜の主神さま」の御陰だから……何か心ばかりでも御礼を差上げにやならん。と云つてお嬢様、私の家にやあ何だつて有りやあしないや……たゞ私はネ、生れると間も無くから此の横笛よこふえが大好きなんで、離さず此腰このへ差して一日これを吹かん日があつたら、私は真違まちがひ無く死んで終ひます。村の人達が云ふ、権三ごんざ……お嬢様私の名は権三と云ふんですよ……の笛を聞くと泣かすには居られないと。私も一人で笛を吹いちや一人で泣ちまけ終うんです。——

『それでお母様が、それではお前御苦労だが毎晩一の釜かまへ行つて「釜の主神さま」に横笛を聞かしてお上げなさい。……と云ふので私は毎晩此処へ笛を吹きに来るんです。——

と、語り終つた美少年の言葉を感じに堪えず聞いて居た美人は熱涙ハラハラと止度も無く

『何と云ふ優しい心でせう。

杜鵑とけん今血を吐いて前山ぜんざんに行く、美少年と美人とは月下に相擁して泣いた。

知らず、嫉妬深き「釜の主神」はこの清らかなる二人の恋を何とか見る。釜の唸りは一層烈しく山谷さんこくに震ふるふた。

(下)

「釜の主神」に聞かす可く吹く笛は、己が恋人を呼ぶ可き笛と變つた。

果然！ 嫉妬深き「釜の主神」は怒つた。

三富村の豪家、山内六左衛門の屋の棟に白羽の矢が立つた。山内家は其の最愛の秘蔵娘雪子を人身御供に捧げねばならぬ。然らずんば笛吹川沿岸五十八ヶ村は、大早魁だいかんぼつに遇あふのである。

心定めし雪子は白無垢いでたちの扮装白馬かふそんに負はれて犠牲の洞穴なまけに着いた。闔村の老若男女、惨として面を揚げるものが無い。あの美しい、あの優しい、あの情深いお嬢様をなぜなれば、此の怖ろしい萬尋の水底に生きながら投げ込まねばならぬか——さりながら財産も人望も愛着の絆も、天下何物も迷信の前に抗す可き力は無かつた。

時恰も六月十三夜、曾て美少年と美人とが恋ならぬ恋を語り初めてより満一周年の今宵。同じ月はまた無心に悲惨な此の光景を照らして居る。

巖頭にかゝる白蓮一枝、咄嗟、狂風花を吹きぬ。

『お嬢様！！

山を劈つんざく血叫けつきうの響。

『通とかつた！！

人押別て駆けつけた美少年。美人を呑んで泡沫を止めざる深淵を睨んで、漲り回みなぎる渾身の血かへと涙とは瀧よこぶえの様。何思ひけん、生れて以来腰を放さぬ横笛よこぶえを抜くより早く淵に投もてあそじて渦もてあそに弄もてあそば

れつゝ沈み行く有様を快げに眺むる事霎時^{しばし}、やがて我と身を跳らして狂瀾の中に美人の跡を追ふた。見めぐる人々物に魅^つかれた如く呆然として為す可き術^{すべ}を知らなかつたのである。

* * * * *

神主は語を更めて云ふた。

『その日に限つて権三の鮎鮎^{ひとつ}が一尾も売れなんだと見え、重箱に入れた儘^{まんま}、悉皆^{そつくり}残つて居た。以来^{それから}、供養の為、それだけのお鮎を毎年六月十三夜——丁度今晚——この釜の中へ進ぜるので。それで此の重箱が明朝^{あす}になると、整然^{ちやんと}と、この通り水引をかけた儘、川下へ流^{ながれよ}寄るけれど中のお鮎だけは有りません。

Nakazato Kaizan

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on Nov 14, 2008